

Ⅲ. アンドロゲン

4. 前立腺癌ホルモン療法と脂質代謝

東北大学大学院医学系研究科外科病態学講座
泌尿器科学分野 講師
三塚 浩二

[Summary]

前立腺癌は男性ホルモンに依存して増殖・進行を示す特徴があるため、男性ホルモンを抑制するホルモン療法は前立腺癌薬物療法の中心的役割を果たす。ホルモン療法により癌の進行を抑制し症状を緩和することが期待できる一方で、男性ホルモンが急速に去勢レベルまで抑制されることにより、体重増加や脂質代謝異常、脂肪蓄積、筋肉量減少などの代謝の変化が起こることが報告されている。また、これらの変化は糖尿病や心血管系イベントなどの疾患の発生につながる可能性もある。日本人でもこのような代謝の変化は起こりうることが報告されており、前立腺癌患者に対してホルモン療法を行う場合にはこのような代謝の変化にも留意するとともに、過剰投与にならないよう心掛ける必要がある。

Key Words :

前立腺癌 □ ホルモン療法 □ 脂質代謝 □
メタボリック症候群 □ 予防

はじめに

1941年にCharles Hugginsらが去勢術により前立腺癌の進行を抑制できることを初めて報告するとともに¹⁾、1980年代にはgonadotropin-releasing hormone (GnRH) agonist製剤が登場し、男性ホルモンを去勢レベルまで抑制するホルモン療法は前立腺癌治療の主役となった。ホルモン療法は前立腺癌の進行やそれに伴う痛みなどの症状を緩和する一方で、さまざまな代謝の変化が起こりうることが知られている(図①)。この章ではホルモン療法に関連した有害事象を解説するとともに、日本人における報告や予防・対策などについても解説する。

脂質・糖代謝への影響

1. 体重増加

ホルモン療法を行うことにより体重が増加することが知られている。研究によりホルモン療法の期間は異なるが、3～12ヵ月のホルモン療法により0.6～3.8%体重が増加することが報告されている²⁾。一年以上ホルモン療法を継続した場合の影響を報告した論文はほとんどないが、Timilshinaらは治療開始時と比較して、1年後は+1.38 kg、2年後は+2.57 kgと体重が増加したが、3年後は+2.30 kg